

ベネテットは正氣に復した時に、自分が何處に居るのか全く解らなかつた。衰弱の極に達して居る彼は、知覺を全く回復するまでに、色々空しい想像の影の中を通過した。彼は、自分が死んで、月の永久に暗黒である方面に居つて、無限の彼方へ映して行く太陽の光線が形造つた、漏斗の中央に横はつて居るのだと思つた。そして、その漏斗の暗い底には烟を發する星の眼が見えた。漸次に彼は、暗黒ではあるが、幽な光、四方の壁が殆ど見えない位麗氣な光に、圍繞まれた處で、非常に大きな寢臺の上に、自分が横はつて居る事を覺つた。大きな物影が彼の周圍に動いて居た。彼に向ひ合つて青い空間があつて、一面に光の小さな點が蒔き散らされてあつた。彼の心臓は鼓動を速めた。本當に、あれは星ではないか？彼はそれが星であつて、しかも自分は月の表面に横はつて居るのではないと云ふ事を自分に納得させる爲めに、寢臺の觸覺と、自分が生きて居るのだといふ事を、我と我が心に氣附けなければならなかつた。それでは自分は何所に居るのであらう？彼は彼の身を包もうとする美しい楽しい心地——自分の身體を最早殆ど感じないで、そして自分の魂の中に、實に近く、實に優しく、實に暖く、神を感じる美しい楽しい心地を、餘念なく楽しんだ。彼は神が彼の在らん事を望み給ふ處に居たのであつた。

誰か彼の額に手を當てた。眩い電燈の光が彼の眼を射た。そして愛情の籠つた、力のある聲が斯う云つた。

「やあ、氣分は如何ですか？」

彼はそれがマイダであると知つた。そして此所は何處か、自分は何故例の小さな部屋に居るのか、と彼に問うた。教授が未だ返事をしない先に、ベネテットは疑懼の念に襲はれた。聖十字架像は？愛する聖十字架像は？議員の家へ置き忘れて来たのだらうか？聖十字架像は彼の側の卓の上に立て、あつた。教授は彼にそれを見せた。

「来る時に一緒に持つて来たのを君は覚えてませんか？」

と教授は「君」といふ愛情の籠つた言葉を使つて云つた。

ベネテットは今までに彼の口から聞いた事の無い、この愛情の籠つた言葉を嬉しく思つて、彼の顔を見た。そして手を伸してマイダの手を探つた。教授はその手を取つて、優しく両手でそれを握つた。

それと同時に、ベネテットは自分の忘れっぽい事を悲しく、耻かしく思つた。彼は今や判断力を失はんとして居るのであらうか？昨日、彼は友人等に如何いふ事を話さうか、蔭な

から彼の影身に附添つて力の限を盡して呉れたあの人に何事を語らうかと、終日そればかり考へて居た。けれども若し彼が判断力を失つたら如何であらう？ 教授はキニーネを彼の身體に満たし始めた。ベネデットはもう少し身體に力を付けて、精神の曇を拂ひ退け度いと思つたから、始の中は喜んでその痛い注射を受け、かつその苦い薬を服んだ。それに又、彼は苦痛を嘗め度いと思つたからでもあつた。噫、左様だ！ 苦痛を嘗め度い、苦痛を嘗め度い！ この間中彼は大變に苦痛を嘗めた。別段何處といつて局部的の痛があつたのも、激烈な痛があつたのでもないが、それは頭髮の根元から足の裏まで全體に亘つた、名狀の出來ぬ一種の苦痛であつた。その様な苦しい時に、自己の意志を神の聖意と合一せしむる事が出來、また自分が嘗むべきものと定められた苦痛を、悉くこの「愛」の御手より受ける事が出来る。といふ事は、彼の魂に取つて大なる祝福であつた——何故彼がその苦痛を受けるのか、その不可思議の理由、宇宙の目的の中に隠された理由は、彼には示されて居ないが、確にその理由は益を齎すものに相違ない。嘗に苦痛を嘗める彼のみにでなく、普遍的に益を齎すものに相違ない。その益たるや、彼の惱める身體より發して、世界の震動する原子の運動の如く、際涯を知らざるものである。よし一個の罪人でも、なほ其身に負ふ苦痛を以て他人の罪

惡の償を爲る事の出來るからには、嗚呼！ 基督にならつて謙遜に大なる苦痛を身に受て、贖罪の事業を繼承ぐのは如何に幸な事であらうぞ。嘗て、サクロ・スベコ修道院へ行くあの淋しい徑の、アニオの水音の轟々たる邊で、永遠に亘つて聳ゆる丘陵に圍まれながら、ドン・クレメンテは斯く彼に語つた。

その死ぬ様な苦痛も今は既に過ぎ去つた。キニーネが頭の中でガーン／＼鳴り出した時に、彼は落膽した。薬は彼を痲痺させやうとして居るのであつた。彼は教授を呼んだ。すると一人の尼が返事をした。彼はボツカ・テラ・ヴェリタ教會へ僧を一人呼びに遣つて貰ひ度いと云つた。

一時間だけ休息しやうと思つて彼處へ行つた教授が、彼を慰めて安心させるために歸つて來た。そして、今まで彼に隠して居たのであるが、話す方がよいと思つたので、ドン・クレメンテからセルヴァに明朝十時に羅馬に着く由を電報で報じて來たといふ事を話した。これはベネデットに取つて大なる喜悅であつた。

「併し間に合ひますでせうか？ 間に合ひますでせうか？」と彼は問うた。

左様、間に合ふ。今の所では別段急に危いといふ事はない。若し熱が再發するやうな事があれば、それこそ生命に係る事であるが、併し、縦し左様なつても、相當の時間は保つてあらう。マイダは餘り有體の事を云ひ過ぎたと思つたので、彼に囁いた。

「併し癒りますよ。」

教授は室を出て行つた。ベネテットはドン・クレメンテの事を考へながら、満足から生ずる安静から軽い睡眠に入つて、續いて夢に入つた。その夢の中に惡の靈が降つて來て、教授の最後の言葉に暗示された偽りの幻を彼の前に浮び出させた。

見ると彼の前に頗る大なる大理石の塚があつて、その頂上には立派な欄干が月の光を受けて白く光つて居た。すつと高く、欄干の背後に、深い森が風に揺られて居た。これも矢張り欄干の付いた六筋の階段が、左に三筋、右に三筋、大なる塚の面を横切つて斜に降りて來て、塚から突出て居る六個の中段の所で盡きて居た。塚の上の欄干は、頂に壘を載せた小な角柱で所々仕切られてあつた。見て居ると、その壘の間に美しい乙女が六人現れた。彼等は舞を奏で、居る様子で、六人が同時に、同じ様に頭を優美に動かしながら、進み出た。彼等は一樣に淡青の衣を身に纏つて、肩を露して居た。彼等は露出した腕を皆同じ様にしなやかに動か

して、身體を前に屈めながら、その高い所から六つの燈々する白銀の盞をベネテットの方に差し出した。それから、彼等は皆同時に欄干を離れたが、直又六筋の階段の上に一齊に現れて、型にはめたやうに揃つた速さで段を降りて、中段に達した時に、優美な様子で身體を前に屈めて、不思議な程眞面目な眼付で彼を熟と見詰めながら、又六つの燈々する盞を彼の方に差し出した。唯の一言も彼等の唇を漏れなかつたけれども、それでも彼は、その六人の乙女がその六つの白銀の盞の中に生命と健康と快樂との仙藥を盛つて、彼に進めて居るのだと知つて居た。

彼は乙女に對して苦しい、激しい恐怖を感じた。それに彼はその燈々する盞や、その上に屈んで居る美しい眞面目な顔から眼を離す事が出来なかつた。彼は一生懸命に眼を閉ぢやうと努めたが、出来なかつた。大聲に神を呼ばうと努めたが、出来なかつた。遂に六人の舞姫は彼の方に盞を傾けた。すると六筋の液體のリボンが空を切つて流れた。「丁度私がブラリアでやつた通りだ」とベネテットは曇つた心の中で人物を混同して、考へた。すると今まで見えた物はすつかり消えて、彼の前にジアンが立つて居た。彼女は例の毛皮の裏の付いた緑色の外套に包まれた身體を眞直に伸して、あの大きな黒い帽子で陰影の出來た顔を此方

に向けて、ブラリアでの二人の初対面の最初の瞬間と同じ様に、彼の顔を熟と見詰めて居た。併し今度はベネデットは彼女の顔付の眞面目さと舞姫の顔の眞面目さが相似て居る事に気が付いた。彼の魂はその七人の魂の聲無き言葉の意義を讀んだ——幸無き人よ、御身は今御身の甚しき謬見を認めたり、御身は今神無き事を知れり！と。七人の眼付の眞面目さは憐愍の悲に他ならなかつた。乙女等は生命と健康と快樂との蓋を、最愛のものを悉く失つて喪に服して居る人に對するやうに、遠慮氣に、喜ばしさうな様子もなく彼に進めた。さながら、それが彼の爲に残された唯一の貧弱な慰安であるかのやうに。その様にしてジアンは彼女の愛を與へやうとした。そしてベネデットは神無しといふ新な證據だと彼には思はれるものに全身を満たされた。それは實際の肉體的感覺であつた。手足全體を這つて、徐に心臓に向つて進む惡寒であつた。彼は烈しく慄ひ出して、そして目を覺した。マイダが検温器を片手に持つて彼の上に身體を屈めて居た。ベネデットは無理に何物かを見やうとする様な眼付で「父よ！父よ！父よ！」と叫びた。尼は其に促されて「天に在ます我儕の父よ」と唱へ出して、生憎少しも艶のない聲でその先を續けかけたが、教授は言葉鋭く彼女を制した。それから彼は検温器をベネデットの腋に挿んだが、ベネデットは殆どそれに氣

が付かなかつた。彼は心を暖かす様な舞姫やジアン姿の彼の恐しい言葉との影を彼の魂の最も深い奥底から離し去らうとする努力と、彼の魂も良心も全く天父の御胸の上に投げ出して、全身全靈を以て天父に絶りつき、天父の中に自己を没入しやうとする努力と、全く餘事を忘れて居た。漸次に誘惑者の影は退き始めた。盛り返し盛り返しては襲ひ掛る彼等の攻撃は、その都度段々時間も短く勢力も弱くなつて來た。この靈魂の神秘的努力の爲めに彼の容貌がすっかり變つたので、マイダは化石した者のやうに彼を見守つて、時計を見るのを忘れて居た。稍あつて、不安に滿ちた祈禱に堅くなつて居た顔が遂に和いで平靜の色を浮べ始めた時に、マイダは氣がついて検温器を抜き取つた。その背後に立つて居た尼は、自分も見やうと思つて、電燈を手を取つて上に舉げた。教授は度數を即座に見分ける事が出来なかつた。そして數秒の間注意がそれに集まつて居たので、二人とも病人が寐返りをし、て教授の方を見て居る事に氣が付かなかつた。遂にマイダは検温器を一振り振つた。何度だつたらう？尼は遠慮して得尋ねなかつた。そして教授の顔色は不可解であつた。病人は教授の氣が付かない中に片手を伸して、その腕にそつと觸つた。マイダは振り向いて、彼の笑を合んだ眼の中に「如何でした？」といふ質問の浮んで居るのを見た。彼は黙つた儘、擴げた

手を左右に振つて答に代へた。その手付は善くも無し悪くも無しといふ事を意味して居た。それから彼は矢張黙つた儘、例の測り知り難い顔付をして、寢臺の傍に腰を掛けて、ベネテツトの顔を見た。ベネテツトは又元の通りに仰向に臥て、最早教授の方は見ずに、廣大な蒼穹の光の小さな點を眺めて居た。

「先生、何時で御座いますか？」

「三時。」

「五時になりましたら、ボツカ・テラ・ヴェリタへ教師さんと呼びにやつて戴かねばなりません。」

「宜しい。」

「その時間では間に合ひませんか？」

この間に對して、教授は高い聲で「否」と答へた。

それから霎時黙つて居て、もう一度、今度は自分の心に答へる様に、前よりは低い調子で「否」と云つた。検温器は三十七度五分まで昇つたので、昨夕から一度以上も増して居たのであつた。若し熱がこれよりも高くなるか、正氣を失ふ虞があるやうだつたら、五時にならな

いでも、ボツカ・テラ・ヴェリタへ使者を遣らう。三十七度五分といふのは随分善くない兆ではあるが、急にそれよりも高くなる様な事は先づあるまい。

マイタは病人に、電燈の光が邪魔になりはせぬかと問ふた。ベネテツトは、物質的には邪魔になりはしないが、精神的には邪魔になる、彼が空を、星の出た夜を、見るのを妨げるから、と答へた。

「我が光」

と彼は靜に云つた。

教授にはその意味が解らなかつたので、彼にその言葉を繰り返させた。それから彼は、彼の光とは何か、と尋ねた。すると力の無い聲は低い調子で云つた。

「夜。」

マイタは詩篇をよく知らなかつた。我々の上に照るあの小さな太陽、この地球よりも一層高い世界を隠す所の太陽を暗いと思つた、あの昔のヘブライ人の深遠い言葉に通じて居なかつた。彼は了解せずして了解した。そして恭敬な沈黙を守つて居た。

ベネテツトは眼を以て星を探つた。彼の良心は、將に來らんとする死の時に先立つて彼

がその一生の道徳的歴史の全體を回顧せんとして居る事を知つて、峻厳な眼を以て彼を凝視めて居る、群星の中に動いて居た。彼が斯く己が過去の所業を追懐して、それを自に語らうとするその言葉は、愛の神に促され、正義の神の名を以て宣告せらるゝ、彼に對する最初の判決であらう。その言葉は、如何なる運動も無くなるものでないから無くならないであらう。その言葉は——何時か、何處でか、如何にしてかは判らないが——一個の靈魂が自己の非を責めて道徳的眞理の正しきを證する最高の證言として現れて、基督の榮光を顯すであらう。彼自の思想に活かされて、無言の星は斯く彼に語つた。そして彼の一生の繪巻物が始から終まで彼の心の中に擴げられた。その外に現れた、著しい輪廓よりも、内に隠れた、道徳的實質の方が明瞭と描かれてあつた。彼はその始の部分から凡て自我の觀念の極めて強い一種の宗教的觀念に支配されて居、愛神と愛人とを個人的福祉の一點に湊合させるやうな順序になつて居、そして自己の完全と報賞とを目的として居るのを見た。彼は斯様に自分が、自己を愛するに勝りて神を愛する事を命する律法に、唯だ口先許で従つて居たといふ事を悲しんだ。それは穩な悲であつた。この認見の辯解をするのが容易であり、罪を教師に塗り付けるのが容易であるからといふ譯ではなく、彼を包む恩恵の波の中に在つて自己の微小なる事を感じ

する事が楽しいからであつた。そして彼は不完全な信仰の爲めに害はれ、官能的欲求の昂進の爲めに左右された過去に於ける自己の微小なる事、一面に淫逸と、軟弱と、矛盾と、虚偽とが入り交つて成つた自己の一生の中央の低處に於ける自己の微小なる事を感じた。彼はその回心——彼の回心は彼の意志に打勝つた或る彼の衷にある意志が彼を促して成就したものである——の時以後の自己の生涯に於ける自己の微小なる事を感じた。そしてこの最後の期間に於ては、彼が彼を善い方に促す所の善い心を天秤の片方の皿に載せて、反對の皿に自己といふものを載せて居るもの、様に思はれた。彼は重い衣のやうに彼を動かさないこの「自己」といふものを振り落して仕舞ひたいと切に願つた。彼はあの幻を愛する心も亦この重い「自己」といふものとは離れない部分であると覺つた。彼は神秘にして測り知り難い神の眞理——それがどの様なものであるにしても——を熱心に求めて居た。そして彼を殆ど寸断せんとする程に激烈な願望を以て神の眞理に己を捧げた。そして大空の星の光が、彼自身や彼の友人やの宗教的觀念に比較して、神の眞理の如何に宏大無限なるかを實に強く感ずる念と、それと同時に又、彼がその宏大無限の境を差して旅行しつゝあるといふ實に堅い信念とを、彼の衷に傳へたので、彼は不意に枕から頭を上げて「嗚呼！」と叫んだ。

尼は居睡をして居たが、教授は油断をして居なかつた。

「如何したんです？何か見えるんですか？」

ベネデットは即座には答へなかつた。教授は電燈を手に取つて、身體を屈めて彼を見た。その時ベネデットは此方を見て、強烈な願望の色を顔に浮べて、マイダの顔を見た。そして永い間黙と見詰めた後に、歎息を洩して云つた。

「あ、先生！本當に貴方は私の行く處へ是非お越しなさい！」

「併し貴方は自分の行く處が判つて居ますか？」

「私は凡ての朽ち果てるもの、凡ての重い、苦しいものを捨て、行くのだといふ事を信じて居ます。」

それから彼は、教區の教會へ使者を遣つて呉れたか、と問うた。否、未だである。あれから未だ十五分しか経たない。ベネデットは詭言を云つた。彼には早一世紀も経つたかの様に思はれたのであつた。彼は教授に、何卒彼方へ行つて少し休息して呉れよと願つて、再び天上の光を凝視め始めた。それから、彼は耶穌を切に慕ひ求め、また彼を抱き上げ、抱き締める二本の人間の腕を切に慕ひ求めながら兩眼を閉ぢた。彼は彼がかの宏大な不思議の境

に入る時に、頭を押し當て、絶る事の出来る、神を肉の中に宿した、人間の胸を切に求めた。六時に彼は聖餐を受けた。検温器は數度昇つて居た。

九時に彼はチヨヴァニ・セルヴァが来て居ないかと訊いた。彼はセルヴァは一旦来て又歸つて行つたが、レイニが待つて居ると聞いた。彼は是非レイニに面會すると云つて、教授が止めさせやうとしても諾かなかつた。彼はレイニに、洞墳の友人等の凡てには會ふ事が出来ずとも、せめてはその中の幾人かだけにでも挨拶をして行きたい、と云つた。レイニは豫てセルヴァに聞いて居たから左様いふ希望のある事は知つて居た。それで彼は、洞墳の會衆は一時頃にマイダの別荘に集る筈になつて居ると、ベネデットに告げる事が出来た。それよりも少し前に、看護して居た者と交代する爲めに這入つて來た尼が、此時つい迂濶と口をこらして、大勢の人が様子を聞きに來て居ると云つた。ベネデットはその當座は何とも云はなかつたが、レイニが歸つてから、教授を呼びに遣つた。教授は據無い用事で大學まで行つて不在であつた。先刻の尼の言葉は、「リヴ井アの家」の様式に倣つて神話の中の出來事を題とした書を以て裝飾してあるこの室の壁を、東雲の光が彼に見せた時から、彼が考へて居

つた事柄を、是非實行しやうといふ決心を彼に固めさせたのであつた。彼は住み馴れたあの小さな部屋へ歸り度くて堪へられなかつた。あの部屋で、友人や、彼に會ひ度がつて居る人々に會はう。あの人が來たなら、彼女にも彼處で會はう。彼は園丁その他の雇人などに話したい事がある云つて、彼等に側へ來て貰つて、自分の願を話した。雇人等は彼を動かす事は出来ない云つて断つたが、彼が後生だから何卒左様して貰ひたいと云つて色々頼んだので、彼等は深く心を動かされて、到頭、主人に暇を出されても構はない決心で、承諾した。「本當に聖者様らしいお考だこそ！」と尼は思つた。ベネットは園丁と一人の僕との腕に昇かれて行つた。彼は毛布に包まつて、聖十字架像を兩手で捧げて行つた。彼が再び自分のみすばらしい小さな部屋に歸つたときの喜悅は餘程深く、誰も皆、彼の容體が快い方に向いたと思つた位であつた。併し検温器は段々昇つて行つた。

一時以後に、検温器は三十九度を示した。ドン・クレメンテは朝の十時半に着いて居た。

## 其三

セルファ夫婦とレイニとは、蜜柑の樹の並木で彼等を待つて居た一團の人々の傍へ行つた。彼等は、アアルツツオの若僧一人を除いて、他は皆俗人であつた。その僧はオリツ色の皮膚

を持つた、丈の低い男で、その黒い眼は深く窪んで、燃ゆるが如き色を浮べて居た。あのエリア・ヴァテルボといふ學生も居た。彼はもう基督者になつて居た。洗禮はこの若僧に授けて貰つたのである。師ベネットは所愛の、あの髪が美しい、ロムバルデーの青年も居た。一人、使徒のやうな顔をした、頗る美しい、若い労働者が居た。これも矢張アアルツツオの者で、あの若僧の友であつた。嘗てスピアコのセルヴァの宅で開かれた宗教的集會に列席した、あのアンドレア・ミヌツチも居た。この他に、海軍省の或る役を勤めて居る海軍士官が一人と、畫家が一人と、他に數人の人が居た。彼等は皆ベネットに對する愛の爲には、如何なる現世の愛をも犠牲に供する事を厭はない人々であつた。彼等の中には、ベネットにの身上に就いて云ひ觸らされた種々の中傷的の風説を、信じた者は一人も無かつた。彼等はベネットを信する念の比較的弱い仲間者に向つて、憤然として彼の辯護をした。將來、彼等は神の攝理によつて試みられて、然る後に師の事業を繼續する使命を授けられるのである、といふ事が出来るかも知れぬ。レイニもその忠實な弟子の一人であつた。彼等はチヨヴァニ・セルヴァを、彼等の師に敬愛せられて居る人物として、敬愛して居たが、併し彼等は彼に對して畏敬の念を有つて居た。彼等はチヨヴァニが來れば直一緒に師の



部屋へ行かうと思つて、先程からこの蜜柑の樹の並木に立つて、彼の来るのを待ち受けて居たのであつた。彼等の中の多くの者の眼には涙が溢れん許に溜つて居た。セルヴァ夫婦が近づいた時に、彼等は皆黙つて帽子を脱いだ。チヨヴァニは皆の先に立つて、小な家の方に歩き出した。彼の妻は一番後から行つた。若い男の中の一人が、彼女に先へ行けよと身振で云つたけれども、彼女は行かなかつた。そしてその男は強ひてと云はなかつた。今は禮儀ななどに構つて居る時でも場所でも無い。マリアはこの人々は、ベネテットの死後、その事業を繼續する爲めに、自分よりも先に召された者であると感じた。彼等は雨が降つて居るのに帽子も冠らず、無言で歩いて行つた。セルヴァも彼等の様にして行つた。マイダが家の戸口で彼等を迎へた。彼は大學から歸つて、ベネテットが園丁の家へ移された事を聞いた時に、赫を腹を立てた。併し、彼は尼や、園丁や、その他の雇人に向つてはそんな事は決して云はなかつたが、半時間毎に計つた熱度の表を見た時に、この愚な行動が熱の経過の上には別に目に見えた影響を及ぼして居ないといふ事を、心の中に如何しても認めずには居られなかつた。今、チヨヴァニ等の一行に、病室には唯だ暫時の間だけ居つて、病人には可成話をさせないやうにするのがよいか、と尋ねられて、彼は斯う答へた。

「如何なりとあの人の思ふ通りに爲さつたら宜しい。運命の定まつた人の御馳走ですから」  
彼は彼等の先に立つて木の階段を昇つて行つた。

「お友達が見えましたよ。」  
と彼は室に這入つて云つた。彼は彼等を凡て室内に這入らせて、戸を閉ぢた。それから兩手を背後で組んで、入口の柱に靠れて、ベネテットを熟と見守つて居た。そしてその丈の高く黒い姿は、ベネテットが弟子達を自分の側に居らせた間、其場所から少しも動かなかつた。

ベネテットの顔は赤くなつて、眼は光を帯びて、呼吸は忙しくなつた。彼は「有難う！」といふ言葉を以て友を迎へた。その言葉は嬉し氣な、強い興奮の調子を帯びて顫うて居た。そしてそれを聞いて啜泣をした者もあつた。それからベネテットは彼等に靜まる事を乞ふかの様に片手を舉げた。臨終聖餐を受けてからは、彼の唯一の祈願は彼の愛する弟子達と語る事が出来るやう、神が眞理の言葉と、それを語る力とを彼に與へ給ふやうとの一事であつた。今彼は聖霊が彼の胸に満ちて居ると感じた。

「私の側へお越しなさい。」

と彼は云つた。

音無く流れる涙に顔を濡らして居た、あの髪の良い青年が、他の者の前に進み出て、寝臺の側に跪いた。師は青年の頭に手を載せて、言葉を續けた。

「互に結び合つて、離ればなれにならぬ様に。」

彼の唇を濡れない、辛い言葉は、更に烈しく弟子等の心を痛ませた。けれども彼等は、將に消えんとする燈火が一頻ばつと明るくなる様に、ベネデットが今死に先立つて最後の教訓と勸告とを與へんとして居るのだと思つたので、泣吃逆を抑へて居た。ベネデットの聲は深い深い沈黙の中に響いた。

「断えずお祈りなさい。そして他人にも断えず祈る事をお教へなさい。之が根本義です。人が眞に或る人間、若くは己が心の中の或る思想を愛するならば、その人の生涯が奴僕(わが)の生涯にせよ、帝王の生涯にせよ、その生涯の種々様々の多くの職務を執つて居る中も、その人の衷心の思は常にその愛する人間、若くは思想を、離れません。思が愛するものを離れないといふ事は、その人が仕事を熱心に行ふ事の妨にはなりません。その人が愛するものに多くの言葉を掛ける必要はないからです。世の中に居る人もこのやうにして、誰か人間を、或は

何か眞理か美の理想を、その心の中に宿す事が出来るのです。貴方は父を常に胸の中に宿して居なさい——父を貴方がたは見事はないが、併し貴方がたの衷に呼吸する愛の靈として、又、父の爲めに生活したいといふ最も美しい、楽しい願望を貴方がたの心に満たした靈として、貴方がたは父を感じたでせう。若し貴方がたが斯くするならば、貴方がたの働は皆眞理の靈に満ちるでせう。」

彼は霎時息を休めて、寝臺の側に腰を掛けて居たドン・クレメンテの顔を微笑みながら見上げた。

「貴方があの懐かしいサンタ・スコラステイカでお話し下さつたお言葉です。」

と云つて、彼は又語り續けた。

「貴方がたの生涯を潔白なものとなさい。然しなければ貴方がたは世人の前に基督を辱めるでせう。貴方がたの思想を潔白なものとなさい。然しなければ貴方がたは凡ての活けるもの、魂の中で相争つて居る、善の靈と惡の靈との前に基督を辱めるでせう。」

斯う云つてから彼は、髪の良い青年に惡の方の及ばぬ様に守護しやうと思つたかの様に、腕で彼の頭を抱いて、將來に、多分、最も望を囑すべきこの青年の爲めに、心の中で祈つた。

それからまた言葉をついけた。

「聖い生涯をお送りなさい。財寶や名譽を求めなされるな。貴方がたの有餘つた財産——貴方がたの裏の聖靈の御聲によつて量つた餘分の財産を、貴方がたが眞理と慈善との事業を爲すために必要な共有基金の中にお入れなさい。人が苦痛を嘗めて居るのを見たならば、必ず是を深切にお助けなさい。貴方がたに腹を立たせる人や、嘲り笑ふ人には、柔和を以て接しなさい。そのやうな人は多くあるでせう。教會の内にも多くあるでせう。惡には屈する事なくお向ひなさい。必要の場合には互に助け合ひなさい。貴方がたは若しこのやうな生涯を送らないならば、眞理の靈に仕へる事は出来ません。この様な生涯をお送りなさい。さすれば貴方がたの結ぶ實を見て世の人は眞理を認める事が出来るでせう。貴方がたの兄弟はその實を見て、貴方がたが基督の屬だといふ事を認める事が出来るでせう。」

ドン・クレメンテは彼の呼吸の苦し相なのを見て心配して、俯いて、彼の顔に口を寄せて、休息せよと低聲で勧めた。ベネテットは彼の手を取つて握り締めて、數秒の間黙つて居た。それから煌々光る大な眼でトン・クレメンテの顔を見て云つた。

「時は急ぎ行く。」

そして又話を續けた。

「貴方がたは銘々、教會の制定した通りの宗教的義務を、嚴正に、そして少しの違背もなく、果しなさい。貴方がたの團體に名を附けたり、團體として意見を發表したり、又は私が話して置いた以上の規則を定めたりしてはなりません。互に愛しなさい、愛があればそれで充分です。互に交通しなさい。私が貴方がたのために定めた道徳的準備によつて貴方がたが今準備をして、それから着手しやうとする事業と同一の事業を、教會の内でも今して居る人が澤山あります——その事業とは、信仰を深め、潔められた信仰を人の生活に注入する事業をいふのです。左様いふ人々を尊敬しなさい。その人々にお學びなさい。併しながら、その人々が自進んで貴方がたの許に来て、その有餘つた所有物を共有基金の中に投じなければ、彼等を貴方がたの團體の中に加盟させてはなりません。彼等が自進んで來るといふ事が、神が彼等を貴方がたの許に遣はし給ふたといふ徴なのであります。」

ベネテットは此處で言葉を切つて、チョヴァニ・セルヴァにもつと寢臺の近くに來るやうに、言葉靜に願つた。

「私は貴方のお顔を見たいので御座います。私が今申しました事は、殊に是から云はうと

思ひます事は、貴方から生れたので御座います。」

彼は手を伸してドン・クレメンテの手を取つて、云ひ足した。

「父はそれを御存知で御座います。人は誰も皆、自分の衷に神の在す事を感すべきであります。併し又、他人の衷にもその事を感すべきであります。そして私は貴方の衷にその事を實に強く感じます。左様です——」彼はドン・クレメンテの證言を求めるかのやうに、その方に向いて、言葉を續けた「人類が互に兄弟となるにはこの基礎の上に立たなければなりません。でありますから、同胞を愛して、そして自分は神に對して冷であるを信じて居る人々の方が、自神を愛して居ると思つては居ますが同胞人類を愛しない多くの人々よりも、神の國に近いのであります。」

セルヴァの背後に、殆ど物に怖ちて居る様な様子で、立つて居た若僧は、この時「嗚呼！その通りです、その通りです！」と叫んだ。セルヴァは歎息を吐いて俯いた。入口の柱に靠れて居た丈の高い、黒い姿は動かなかつたが、ベネテットを見詰めて居たその眼には、得も云はれぬ様な熱心と、優しさ、悲色の色が浮んだ。

ドン・クレメンテは又病人の顔に口を寄せて、暫時休息して呉れよと云つた。尼も亦同じ

く、休むやうに彼に願つた。マイダも、弟子達も、口を開かなかつた。ベネテットは水を少し飲んで、尼に禮を云つて、又語り始めた。

「小兒の食物を食べて居ては滋養分を得る事の出来ない成人の爲に、信仰を潔めなさい。貴方がたの事業の中のこの部分は、教會の外に居る人々——名ばかりは教會に屬して居ても、或は居なくても、兎に角教會の外に居る人々、貴方がたが日常絶えず接觸する人々の爲めでありませぬ。神の御心を崇める爲めに働きなさい。何事にも勝つて神を禮拜して、そして神や神の律法に反した眞理は無いといふ事を教へなさい。併し又、これ等の事を努めると同様に、小兒が成人の食物に唇を近付けない様に、氣を付けなさい。人の生涯が潔くて、その良心が正しければ、その信仰が不純であつても、不完全であつても、厭に思つてはなりません。何故かといへば、神の無限の深さに較べてみれば、貴方がたの信仰と、單純な、賤しい女の信仰との間に殆ど差違が無いからであります。そして若しその女の良心が正しくて、その生涯が潔ければ、貴方がたは天國に入る時にその女よりも先んずる事は出来ないでせう。決して難しい宗教上の問題に關する著述を、賣る爲めに出版しなされるな。賣るよりも、深く考へて適當な人々に頒ちなさい。そして決して著述に署名しなされるな。」

「潔められた信仰が人の日常生活の中に透徹する様に働きなさい。この働きは、教會の中に在る人々の爲め、——又教會の中に在りたいと思ふ人々の爲め——左様いふ人の数は多い。無数であります。——教理を本當に信じて、この上に未だ教理が増えなくても喜んでそれを信じる積で居り、奇蹟を眞に信じて、奇蹟がこれ以上に増しても喜んでそれを信じる積では居るが、山上の垂訓の中の『福なる哉』の聖言を本當に信じないで、そして基督に向つて『主よ、主よ!』と云ひながら、基督の御意を悉く爲すのは餘りに困難であると思ひ、聖書の中に基督を探り求めるだけの熱心すら無く、又宗教とは、何よりも先づ、行と日常生活であるといふ事を知らない所の人々の爲めであります。彼等のやうに、言葉を多くして祈る人々、度々偶像信者の様な祈り様をする人々に、制定された祈禱の外に、神秘的の祈禱をも常に捧げる事を教へなさい。この神秘的祈禱の中に、最も純粹の信仰、最も完全な希望、最も完全な仁愛が在るので、之のみで魂を深め、日常生活を深める力があります。私は貴方がたに、公然、牧者に代れよと云ふのでせうか? 否、左様ではありません。銘々、自分の家族の中で、或は自分の友人の間に在つて、働きなさい。筆を執れる人は、筆を以て働きなさい。斯くして貴方がたは、牧者の生ひ出る土地を耕すのです。」

「我が子等よ、私は貴方がたが世界を改新するであらうとは、今貴方がたに約束しません。貴方がたは、ガラリヤ湖上のペテロと其仲間の様、夜の中に、目に見える獲物も無く、働くのでせう。併しながら、遂には基督が來り給ふのでせう。その時には貴方がたの獲物は必ず大なるものであります。」

彼は口を噤んで、弟子等の爲めに祈り、多くの種類の多くの敵の手から、彼等の身に及ぶべき多くの苦痛を豫知して、歎息を洩した。それから彼は最後の言葉を話した。

「後には、貴方がたのお祈りを戴きます、今は接吻を。」

弟子等は聲を揃へて、彼に自分達を祝福して貰ひ度いと願つた。彼は、自分などには人を祝福する價値がないと思ふと云つて、その事を避け様とした。

「私は、基督が眼に泥を塗つて見える様にして下さつた、つまらない盲人に過ぎません。」

ドン・クレメンテはその言葉が聞えなかつた様子であつた。彼は跪いて云つた。

「私にも祝福して下さい!」

ベネデットは謙遜にその乞に從つて、ドン・クレメンテの頭に手を按いて、規定の祝福の言葉を唱へて彼に接吻した。それから、同じ事を一人宛凡ての人にした。祝せられた者は

皆、頭に按かれた手から聖靈の氣息が自分の裏に流れ入る様に感じた。若僧は自分の順番が来た時に、低聲で云つた。

「先生、私共にも何かお勸告が？」

死に瀕して居る人は心を落着けて答へた。

「貧しい生活をなさい。有徳な圓滿の生涯をお送りなさい。尊稱や、華美な式服や、個人としての權威や、階級としての權威を喜ばしなさんな。貴方を憎む者を愛しなさい。徒黨を避けて、神の聖名によつて人と仲善くなさい。官職に就きなさんな。人の魂に壓制を加へたり、或は餘りに思ひの儘に統御しやうとしなさんな。僧侶を人工的に訓練しなさんな。貴方がた教役者の數の多からん事をお祈りなさい。併しながら、數の尠い事を恐れなさんな。貴方がたに深い人間的の智識が必要だと思ひなさんな——貴方がたには唯だ理性に對する深い尊敬の念と、普遍的の分つ事の出来ない真理に對する深い信仰とのみが必要なのです。」

最後に進み出たのはマリア・セルヴァであつた。彼女は寢臺から少し離れた所に跪いた。病人は彼女の顔を見て笑を含んで、起てよと手眞似で云つた。

「私はもう御主人の中に貴女を祝しました。私は貴女方お二人を區別する事は出来ません。」

貴女は御主人の魂の一部分です。貴女は御主人の勇氣の源です。その勇氣を、御主人の前途に待ち受けて居る苦痛の時に、お増させなさい。そして貴女方御夫婦が、最後に至るまで、基督教的愛の詩でお有りなさる事を祈ります。何卒お二人とも暫時後にお残り下さい。」

弟子等が出て行つた時に、室内は前よりも暗くなつた。雷鳴が聞えた。そして尼は窓を閉ぢに行つた。けれども、閉ぢる前に彼女は庭園をちらと見下して「まあ、可哀相に！」と叫んだ。ベネテットはそれを聞いて、如何したのかと尋ねた。尼は、庭園は彼に會ひに来た人で一杯であるが、大雨が今にも降り出しさうである、と話した。それで彼はセルヴァ夫婦には暫時待つて呉れるやう、教授には人々が這入る事を許して呉れるやうに、願つた。

大勢が幅の狭い木製の階段を昇つて来る聲音が聞えた。室の戸が押し開かれて、數人の者が足を爪立て、這入つて来た。暫時の間に室内は人で一杯になつた。帽子を冠つて居ない澤山の頭が入口から内を覗いた。誰一人口を利く者は無かつた。皆の者はベネテットを熱く見詰めて居た。そして彼等は恭しく靜肅にして居た。ベネテットは両手を舉げて、兩腕を擴げて、彼等に會釋した。

「皆さん、有難う。貴方がたの中には私に聞いた人があるに違ひないが、あの通にお祈りなさい。そして私は、神様が何時も貴方がたと共にあつしやる事を祈ります！」

大な肥つた男が一人、顔を真赤にして答へた。

「私等はお祈を致しますが、貴方はお亡くなりなさんちやごむせん。死ぬなんてへ事は本當になさりますな。それよりか、何卒私等を祝して下さい。」

「左様だ。私等を祝して下さい、私等を祝して下さい！」

と多くの聲が繰り返した。

その中に、上らうと思つても上れない人々の待ち遠し相な聲が、狭い階段から聞えた。ベネテットは低聲でドン・クレメンテに何か云つた。ドン・クレメンテは室内に居る人々に、列を作つて寢臺の前を通つて、室外に居る人々と入り代れよと命じた。

彼等は皆順に寢臺の前を通つて行つた。彼等は、労働者や、商店の手代や、果物賣の女や、行商人や、乞食などで、皆テスタッチオに住んで居る貧しい人々であつた。折々ベネテットは「左様なら」とか「機嫌よくね」とか「私の爲めにお祈をして下さいよ」とか「又天国で遇ひませうね」といふ様な訣別の言葉を、疲れた聲で云つた。中には通りがけに黙つて

一寸跪いて行く者もあり、寢臺に手を觸れて、それから十字を切る者もあつた。中には又、自分等や自分等の愛する者の爲めに祈つて呉れよと云ふ者もあり、又ベネテットに神の祝福の下らん事を祈る者もあつた。一人の男が、自分が悪い噂を本當だと思つた事をどうか宥して下さいと云ふと、それに續いて「私も宥して下さい、私も！」と詫びる聲が一頻聞えた。

例のテラ・マルモラ町の僱傭の老婆も来て居て、あの老僧が懺悔をしたといふ事を、涙ながら彼に語り始めた。そして自分の感謝の念を充分表したいと思つたのであるが、話半分背後から来た人々に向ふへ向ふへと押し遣られて、永久にベネテットの面前から引き離されて仕舞つた。このやうにして多くの人——嘗て彼に肉體も精神も慰められた多くの人が——今日を最後と彼の前を通つて、そして涙を流しながら、永久に彼と別れて行つた。彼は其中幾人かを覚えて居て、手眞似を以てその人々に會釋した。彼等は涙に顔を濡らして、幾度も後を振り返りながら、順々に進んで行つた。狭い階段を降りて行く人の流は、昇つて来る人の流と擦れ違つて、今見て来た悲しい室の印象を、未だ見ぬ人々に傳へた——「まあ！何といふお顔だらう！」——「まあ！あのお聲は如何だらう！」——「噫、あゝ！死にかけて居なさる！」——「あの方は神様のお使だ！」——「まあ行つて見なさい！」——「あの方

の眼の中には天国が映つて居る！」又中には、低聲で、彼を悪く云つた奴等を呪つて居る者も尠くなかつた。戦慄しながら、毒害だとか、謀殺だとか云つて居る者も随分あつた。噫！あの人は警察の役人に連れて行かれて、歸つて來たら、こんな容體になつて居た。——悲しげな嘔も、腹立たし氣な嘔も、歎くが如くに長く轟く雷鳴と、ざつざつと大きな音を立て、歇間無く降る雨の聲とに消されて仕舞つた。

人の河が全く流れ出て仕舞つた時に、室内の空氣が不純になつて居たので、マイダは窓を開けさせた。ベネテットは側に居た人々に、自分の頭を少し高くして呉れよと云つた。彼はキーリアン岡の方に梢を曲げて居る、ある松の大樹を見度いと思つたのであつた。その松の暗緑色の頭は荒模様の空を撃いて立つて居た。ベネテットは永い間それを熟と眺めて居た途に彼の頭が再び枕の上に休らうた時に、彼は手眞似でドン・クレメンテに自分の方に身體を屈めて貰ふやうに頼んで、そしてその耳に口を當てん許にして囁いた。

「貴方は御存知御座いませんでせう、私はあちらの別荘の方から此處へ連れて來られます時に、あの窓から見えます松の樹の下に臥かして貰つて、彼處で死に度くてなりませんでしたので御座います。けれども、私は直、その事は餘りに烈しい願であり、又善くない事だと思ひました。それに又」と微突みながら「如何しました所で、どうせ法衣が無いので御座いますからね。」

ドン・クレメンテの唇が微に動いて、彼があゝの法衣をスピアコから持つて來たといふ事を、ベネテットに明した。ベネテットは強烈い感動が急に大波のやうに胸の中に涌き起るのを覺えた。彼は兩手を緊と握り合はせて、胸中の争闘の終るまで黙つて居た。その争闘は、彼の幻が實現せられん事を願ふ心と、その實現が自然的には成就せられないといふ事を感ずる心との争であつた。彼は自己の願望を棄て、神の聖旨に服従する一行爲に、彼の心を集中した。

「主は私が此處で死ぬ事を望み給ふのですが、併し、せめては生前に寢床の上に法衣を掛ける事だけでも許し給ふのです。」

ドン・クレメンテは身體を屈めて、彼の額に接吻した。

二人が話して居る間、セルヴァ夫婦は少し離れて待つて居た。ベネテットは彼等を側へ呼んで、もう半時間程経てば、自分はテサレ夫人に面會しやう、併し彼女は獨で來ないやう



にして貰ひたい、セルヴァ夫婦と連れ立つて来てよい、と云つた。マイダはセルヴァ夫婦と一緒に室を出て行つた。尼は居睡をして居た。それから、ベネテットはドン・クレメンテに、後日法王の許へ行つて、あの幻の終は遂に實現せられなかつた事、斯くてベネテットの生涯の中で奇蹟的と思はれた事は皆消滅して仕舞つた事、そして彼は嘗て法王より受けた祝福の樂しさを死ぬに先立つて感じた事、等を法王に申し上げて呉れよと云つた。

「それから祝下、私が又祝下のお心の中で話す事が出来ませうと、申し上げて下さい。」と彼は云ひ足した。

彼の呼吸の苦し氣な様子は前よりも減じたが、聲は段々弱つて行つて、體力は熱と共に彼を去りつゝあつた。ドン・クレメンテは彼の手首を取つて、暫時握つて居た。それから彼は立ち上つた。

「法衣を取りにお出でなされるので御座いますか？」

とベネテットは美しい微笑を顔に浮べて、低聲で云つた。師の坊の美しい顔は赤くなつた。彼は言葉を濁す事を自分に勤める人間的の感情を急いで抑へ付けて、答へた。

「左様だよ。もう時が来たと思ふ。」

「何時で御座いますか？」

「五時半だよ。」

「七時になりますでせうか？八時でせうか？」

「いや、そんなに急ではあるまいが、私はこの慰を直お前に受けさせたいから。」

別荘のある小さな座敷では、チヨヴァニ・セルヴァが、時計を出して見て妻に云つた。

「もう、行つてお出で。」

ジャンかベネテットに面會する時に、マリアとノエミとが彼女に連れ立つて行く手筈になつて居た。ノエミは姉婿の方に兩手を伸して、身を頼はして云つた。

「兄さん、妾は妾の魂の事で少しあの方にお知らせする事があるのです。兄さんよりもあの方に先に話しても、氣に障へないで、置いて下さいね。」

ジャンにはノエミが瀕死の病人にどの様な事を知らせる積なのか推量が出来た。それはノエミが近い未來に於いてカトリック教に改宗するといふ事であつた。ジャンが今日のこの大事の時を迎へる爲めに心の中に蓄へて置いた勇氣は、今彼女を棄て、去つて仕舞つた。彼女

はノエミを抱き締めて、わつと泣き出した。セルヴァ夫婦は彼女の落涙の原因を誤解して、種々言葉を盡して勵まそうとした。ジアンは啜泣の合間々々に、何卒貴女方は、行つて下さい、是非行つて下さい、妾は如何しても行けません、と言つた。ノエミだけはジアンの心中を解した——ジアンはノエミの意中を推量したが、彼女にはノエミのする通りが出来ないから、それで行かないのである。ノエミは彼女を抱き締めた儘、是非行つて呉れよと云て、只管に頼んだ。懇願した。そして彼女に囁いた。

「貴女は今となつて、何故意地を張るのです？」

ジアンは尙啜泣しながら答へた。

「噫！貴女には妾の心が解つてるのね！」

それから、ノエミが、それでは自分に行かないと云ふので、今度はジアンが懇願する番になつた。何卒行つて下さい、直様行つて下さい、そして早くあの人にその愚を與へて下さい。妾は、妾は行かれない、行かれない、行かれない！彼女は如何に勸めても動かかなかつた。僕が一人セルヴァを呼びに来た。マリアとノエミとは室を出て行つた。

側に誰も居なくなつた時にジアンは、急いでマリア等の跡を追はうか、我を折らうか、彼

の側へ行つてノエミと同じ事を彼に聞かせて喜ばせやうか、といふ氣に霎時の間なつた。彼女はがつくり膝を床に衝いて、眼前に彼が立つても居るかの様に、兩腕を擴げて、啜泣しながら叫んだ。

「嗚呼戀しい、戀しいピエロさん！如何して妾は貴方を瞞す事が出来ませう！」

彼女は今までも自分の不信仰を打ち壊し度いと悶いた事は幾度もあつたが、何時もその努力は無益であつた。急に起つた感情に動かされて信仰に身を委ねた所で、永持はしないであらう。その事を彼女はよく知つて居た。

彼女は跪いた儘で、又呻く様に云つた。

「貴方は何故妾一人だけに會つて下さらないのです？何故妾だけに會つて下さらないのです？信心深い人の良心に厭な氣を起させまいといふ心からですか？貴方の心が妾の絶望に亂されてはならないからですか？何故妾だけに會つて下さりませんか？他人の居る前で、妾は如何して心の中を話させませう？貴方が信仰してゐらつしやる主耶穌の様に優しい貴方が、何故妾一人だけに會つて下さりませんか？噫！」

彼女は、若しピエロが彼女の言葉を聞いたならば「宜しい、お出でなさい！」と答へるに

違ひないと思つて、起ち上つた。霎時は両手を額に當てた儘、石に成つた様に熟と立つて居たが、纏て睡遊病者の様な足取で徐々室を出て、玄關を通つて、庭へ降りた。

雨脚は極めて繁く、未だ歇まずに閃く稲妻に折々撃かれる空は暗かつたので、この二月の宵の四邊の氣色は、未だ七時にもならないのに、早夜に入つたかと思はれる位であつた。ジアンはその儘で、帽子も冠らずに、篠つく冷い雨の中へ出た。彼女は常の通の足並で、右手の蜜柑の並木の方へは行かずに、左手の、二列に植ゑ付けた大なる龍舌蘭の間を傳つて、蓄薇を纏ひ付かせてある月桂樹とサイプレス樹と橄欖樹との小な木立の方に、爪先下りに付いて居る小徑を選んだ。そして、キーリアン岡の方を向いて居るあの松の大樹の側を通つてから、右手に長く曲つて付いて居る小徑を傳つて紆り降りて、園丁の小な住居の數歩下つた、帯の様に取巻くマートル樹の中の峻しい坂にある古い石棺の中へ落ちる泉の所へ來た。此處で彼女は足を止めた。その小な家の窓の一つには燈火が點いて居た。屹度あれはピエロの部屋窓に違ひない。影法師が一つ、窓を横切つてちらついた——多分あれはノエミであらう！ジアンは泉の大理石の縁に腰を下した。この泉へ這入つたら死ねるだらうか？若しカルリノといふ弟が無かつたら、自分は死なうとするだらうか？役にも立たぬ思案！彼女はその様な事

を永く考へては居なかつた。彼女は眼と魂とを以て燈火の點いた窓を見詰めたが、冷い雨の中で、待ちに待つて居た。他の人影が通つた。彼等はもう出て行くのであらうか？左様だ、多分マリアとノエミとは出て行くであらう。併し彼等はピエロを獨棄して置きはしまい。マイダが側に居るであらう。あのベネディクト僧と尼とが側に居るであらう。でもまあ、兎に角行つてみやう。蜜柑の並木を急いで通る寔音、誰か、園丁の家の方へ行く。一度立ち上つたジアンは又腰を下した。寔音の主は今家へ這入つた。窓の影法師の數が殖えた。二人の人が勢よく話し合ひながら出て來た——教授とゾヴォアニ・セルヴァとの聲。二人は誰か、様子聞きに來たといふ事を話して居るらしかつた。又他の人達が出て來た。軒から雨滴がその人々の傘の上にはどく／＼落ちた。マリアとノエミに違ひない。ジアンは又起ち上つて、歩き出した。

彼女が小な家の入口を這入ると、臺所に幾人か人が居るのが見えた。彼女は一人の少女に、二階へ上つて、誰か病人の側に居るか見て來て呉れよと頼んだ。少女は暫時はもじ／＼して居て、承諾しなかつたが、到頭承知して二階へ上つて行つたかと思ふと、直又降りて來た。坊さんと尼さんとが部屋の中に居る。ジアンは紙を一枚と、鉛筆と、燈火とを乞ひ受けて、

それから書き始めた。

「先生、何卒——」

彼は筆を止めて耳を敏てた。誰か木製の階段を降りて来る。男の聲音だから、先生に違ひない。では口で云はう。彼女は鉛筆を投げ棄て、彼に會ひに階段を昇つて行つた。暗かつたので、ドン・クレメンテは彼女をマリア・セルヴァだと思ひ違へた。そして彼女が口を開かぬ中に、斯う云つた。

「今静にして居ます。寝て居る様です。お妹さんのお話を聞いて大變喜んで居ましたよ！ 教授は今夜中保つたらうといふお考です。もう一人の御婦人呼びにお遣り下さい。あの人はその方に會ひ度いと云つて居ました。私は貴女がもうその方を呼びにお出でなさつたのだと思つて居ましたのです。」

ジアンは黙つて居た。彼女は一足片脇へ寄つた。ドン・クレメンテは「失禮します。」と云つて、彼女の顔を見ずに側を通り過ぎて、パンと水を少し貰ひに臺所へ這入つて行つた。彼は昨夜から少しも物を食はずに居たのであつた。ジアンは木の葉の様に震うて居た。あの人が彼女に會ひたいと云つた！ 彼女はその言葉を聞いて、斯様に機會を與へられて、眩暈

を感じた。音を立てずに彼女は階段を昇つた。音を立てずに彼女は病室の戸を押し開けた。尼は彼女を見て、立ち上らうとした。ジアンは指を唇に當て、身振を以て尼を制して、そして音を立てずに寢床に近付いた。彼女は蒲團の上に何か知らぬが長い、黒い物が掛けてあるのを見て、何故とも解らずに、愕然として立ち止つた。弱い呻き聲。寢臺の人は、何かを探つて居るのか、如何いふ意味とも確に判らぬ手付で、右の手を上げた。尼が立ち上つたけれども、ジアンはそれよりも早く枕頭に駆け寄つて、身を屈めてピエロの顔を覗き込んだ。ピエロは又も呻きながら、手を動かして居た。

ジアンは心配さうに尋ねたが、彼は返事をしなかつた。彼は唯だ呻いては、寢臺の側の何物かを見るのみであつた。ジアンは彼に水を一杯進めたが、彼は首を振つた。彼女はピエロが何を求めて居るのか解らなかつたので困り果てた。あ、左様だ！ 聖十字架像！ 聖十字架像！ 尼は燈火を手に取り上げた。ジアンは聖十字架像を手を取つて、ピエロの方へ差し出した。彼はそれに唇を押し當て、ジアンの顔を熱く見た。熱く見詰めるその大な、硝子の様な眼の中からは、死が外を覗いて居た。尼は驚の叫聲を上げて、先生を呼びに走つて行つた。ピエロはジアンの顔をしげしげと眺めた。彼は非常の努力を以て聖十字架像を兩手で握つて、

ジアンの方へ差し上げた。彼の唇は一度動き、二度動いたが、何の聲も口を漏れなかった。ジアンは両手でピエロの手を握って、熱情に満ちて聖十字架像に接吻した。すると彼は眼を閉じた。微笑が満面に浮んだ。

彼の首が右の肩の方へ少し傾いた。彼はもう動かなかつた。

聖者終

■ 許不製複 ■

大正元年 二月二十日 印刷	大正元年 二月二十日 發行	譯者 小野村林藏	譯者 吹田佳三	發行者 福永文之助 <small>東京市五區尾花町三丁目十五番地</small>	印刷者 村岡平吉 <small>横浜市本町五丁目八十七番地</small>	發行所 警醒社書店 <small>東京市京橋區尾花町三丁目十五番地 新橋一五八七</small>
---------------------	---------------------	-------------	------------	--	---	--

△ 定價 壹圓五拾錢

■ 刷印社會資合刷印音編 ■

と 譯 翻 と 作 創

徳富健次郎著

■廿一版■

小説

潮

定税四拾錢

■一貴族の家庭に起りたる悲劇を、著者獨特の筆にて描寫せるもの、あのうら若き道子が黒髪を、ふつと剃りたるいぢらしさ。

渡邊千冬譯

■四六判美本■

小説

沼

定税七拾錢

■覺ヶ沼は名こそ凄けれ、フランスの閨秀作家、ゲオルジュ・サンドの傑作である。その作物中、殊に田園小説として持擧さるるもの、サンドは文學的勞作の結果、贏ちえたる四拾萬の財産を、生前人に悉く與へつくしたさいふ人、死してはノアン農民たちの墓場に葬られたのである。彼女は佛蘭西婦人である。佛蘭西婦人の天才者である。その筆端の人情の機微に觸れ、うるはしき自然を背景に、清く美しい戀愛を描けるところ、いはゆる寫實小説とは異にするのである。

松本雲舟譯

■再版■

小説

戰

定税壹圓拾錢

■ジョン・パンヤンの大々傑作なる、セ・ホーリ・ウオアの翻譯なり。傳奇文學の白眉にして、中世紀の騎士氣質を彷彿たらしむる名作なり。表装は極めて非現代的の高尙なるもの。

大宮季貞編

良寛和歌集

定税四拾錢

■春の野に里の子供さたはむれ暮し、秋の長夜は村の翁と語りあひし、七十餘年の生涯を花に歌ひ、月に嘯きて終りたる明治の西行が偽らざる吟調、即ち良寛歌集なり。

内村達三郎譯

トロイの歌

定税四拾五錢

■ホメロスが不朽の詩篇、實にトロイのうたならずや。一トたび誦すれば、想や遠く三千年前の太古に遡り、この世の貧乏辱と嘆きを忘るゝなり。花の長、月の夕この大雄篇を吟じたまへ。

と 譯 翻 と 作 創

中村春雨著

小説の母

定税價五拾錢

人の母をはじめ、岸の灯、村の名物、クリスマスの前夜、驛路、まごころ、渡守の娘、春の姿、白骨、花の種、五月雨、新緑、不朽、雨の萩寺など廿一篇を輯めたものであります。

松本雲舟譯

アダム・ピキド

定税價五拾錢

英國の國秀作家ジョオツ、エリオット女史の名作です。少女が悔罪の苦痛の心理を巧みに描いたもの、眞の女性解放論はこの作者からきかれるのです。

紫園山人譯

少女日記 忘れな草

定税價四拾錢

エリザベス、ブレンツースの原著にして、可憐なる少女の信仰的情趣を描き、家庭文學の上乗なるもの、最も少女の讀物に適す。

と 譯 翻 と 作 創

徳富健次郎著

卅五版

小説 寄生木

定税價四拾錢

多情多恨の青年土官は、東北海岸の寒村に生れて、驚くべき悲劇中から脱して、乃木將軍に身をゆだね、日露戦役に出征して、金銀勲章を握つた彼は、あはれ、失戀失意のうちに死んだ。生前の彼は、明るい南を戀つてゐた、あゝ此の青年の哀音を、言葉やさしい南國の人はいかにきく乎。また乃木大將夫妻を偲ばんと人は、來りて「寄生木」巻中にその面影と涙痕を尋ねよ。

吹田 蘆 風 譯

四六判クロス製

戯曲 マリア・マグダレナ

定税價六拾錢

劇編逸に於ける大劇詩人ヘッセルの傑作にして、かの國に世話物として持廻さるゝ大作なり。指物師が娘のはかなき戀を寫したるもの。

五來素川譯

七版

小説 未だ見ぬ親

定税價六拾五錢

佛のエクトルマローの名作、サンファミエーの譯であります。榮なき可憐兒を中心として描いたる悲しい、そしてあもしろい物語です。

三新刊書

■エーラルス氏著  
青木律彦氏譯

■菊列クロス製

現代的基督教

定價 壹圓廿五錢  
郵税 八錢

■ルドルフ、オイケン氏著  
額賀鹿之助氏譯

■四六判クロス製

吾人は尙基督教徒たり得る乎

定價 七拾錢  
郵税 六錢

■本書はイエナ大學教授オイケン博士が最近天下に發表したる信仰告白也。近代文明は基督教と衝突し、殆ど之を否定し去らんとするにも拘はらず、基督教は猶依然、儼然として存在するの權利あることを闡明す。

■山西増太郎氏著

■四六判クロス製

聖地パレスチナ

印刷中

青山學院神學校教授 高木壬太郎著  
ドクトル オブ デビニチイ

基督教大辭典

全壹册

附錄 基督教會年表

定價 拾五圓 小包料 卅貳錢

■四六倍判壹千六百頁 背革クロス 天金箱入 厚二寸五分  
■六號活字三段組 説明事項三千百有餘 挿圖百四十三個

本辭典は、基督教百科全書にして、基督教に關する一切の事項を收め、基督教に間接に交渉ある、文學、政治、哲學、科學、法律、郷土、美術上の事項をも網羅せるが故に、一册子を以て、

聖書辭典、聖書總論、聖書神學、組織神學、聖書歴史、聖書古物學、教會史、西洋哲學史、西洋文學史、傳道史、宗教家傳記、哲學者傳記、科學者傳記、詩人傳記、教義史、日本現代教會史等を蒐めたるに均しき實質を有す。

本書だにあらば精神界、思想界の消息は掌を指す如し。



終